

ている。国連事務総長やタイ首相自ら参加し、連日テレビで放映され、会議参加者は2万人近かったと報告されている。個々のセッションでも、政治的な議題は多かった。しかし、こうした活動の背景には、さまざまな学問領域からの成果があることは確かであり、学術研究の発表も数多くあった。とりわけ人口学は、性行動、移動、疾病と死亡など、エイズ研究にきわめて多彩な接点を持ち、Basia ZabaやJohn Clelandら著名な人口学者も多大な貢献をしている。世界的な規模での対策を推進するための枠組みも整いつつあるが、なお不十分であり、HIV/エイズ流行の深刻さと重要性、そして人口研究者が貢献する機会は当面なくならないであろう。(小松隆一記)

国際社会学機構 (IIS) 第36回大会

社会学では最古の国際学会と言われる国際社会学機構 (International Institute of Sociology) 第36回大会が2003年7月7日(水)～11日(日)に中国社会科学院で開催された。本来は1年前に開催される予定だったが、SARSの影響で延期されたものである。組織委員長は中国社会科学院社会学研究所の景天魁博士で、実際の運営は同研究所が中心となって行われた。参加者リストが配られなかったため、正確な参加者数はわからないが、報告者数が千人を超え、日本人報告者数が百人を超えていたことは確かであろう。中国・韓国の人口学者は比較的良く見かけたが、日本人口学会会員の参加者は落合恵美子(京都大学)、田淵六郎(名古屋大学)、小島の3名だけであったように思われる。また、当研究所の評議委員の富永健一教授も基調講演をされ、評価委員の庄司洋子立教大学教授も参加されていた。

プログラムから見る限り、約百のセッションで約千の報告が行われたことになるが、実際に参加できなかった報告者も散見された。中国で開催されたこともあり、高齢化、人口移動等の人口に関連するセッションが比較的多かったし、人口学者でもある北京大学社会学・人類学研究所長の馬寅教授も基調講演をされた。また、国際社会学会 (ISA) の人口部会が組織した Session 099: Population Policy and Reproductive Health もあった。小島は Session 011: Children's Well-Being in the Age of Globalization で "Determinants of Gender Preference for Children in Japan: A Comparison with Korea" と題された報告をし、Session 013: General Social Surveys in East Asia で "Determinants of Attitudes toward Children in Japan and Taiwan: A Comparative Analysis of JGSS-2000/2001/2002 and TSCS-2001" と題された報告をした。なお、第37回大会は2005年7月5日～9日にストックホルムで開催される予定である。(小島 宏記)

第13回フランス語圏人口学会 (AIDELF) ブダペスト大会

フランス語圏人口学会 (AIDELF/Association Internationale des Démographes de Langue Française) の第13回大会が2004年9月20日(月)～24日(金)の5日間にわたってハンガリー共和国ブダペスト市のハンガリー科学アカデミー会議場で開かれた。現地実行委員会は主としてハンガリー中央統計局と付属ハンガリー人口研究所によって担われた。初日の午前から2日目の午前にかけてハンガリー人口に関する特別セッションと世界人口に関するラウンドテーブルが開催され、2日目の午後から5日目にかけて「国際人口移動：測定・分析・将来推計」(Les migrations internationales: Observation, analyse et perspectives) を全体テーマとする5つのセッションで約50の報告がなされた。小島は4日目午前の「移動動態：状況と変動」と題された第3セッションで "Augmentation

rapide de population musulmane au Japon: dynamique démographique” と題された報告を行った。開催地のためか、テーマのためか、ヨーロッパからの参加者が圧倒的に多く、北米とアフリカからの参加者が若干名いたが、アジアからの参加者は小生のみであった。なお、2006年に予定されている第14回大会は João Peixoto 理事のお世話によりポルトガルで開催されることになっている。

(小島 宏記)

2004年イギリス人口学会年次大会

イギリス人口学会 (British Society for Population Studies) の2004年度大会は、9月13日から15日にかけて、レスター大学 (University of Leicester) で開催された。今年度の大会も、イギリスだけでなく、他のヨーロッパ諸国やアメリカから多数の研究者が参加し、相変わらずの盛況ぶりであった。

今年度の特別テーマは「Ethnicity, refugees, and group conflict」であり、David Coleman (University of Oxford), David Voas (University of Manchester) などをパネラーにした特別セッションが行われた。この特別セッションでは、国際人口移動の動向と民族構成の変化と、これらがもたらす政治的、経済的、社会的影響について発表がおこなわれ、先進国だけでなく開発途上国をも視野に入れたグローバルな視点から、国際人口移動に関する問題が活発に議論された。

また、分科会では、出生、死亡、婚姻、高齢化、人口移動、世帯、家族計画、歴史人口学などの各テーマについて、多数の報告が行われた。

近年、グローバリゼーションの進行に伴い、日本に流入する外国人の数は増加しつつあり、その社会的影響も大きくなりつつある。こうした状況を考える上で、今年度のイギリス人口学会の特別テーマでの報告は、示唆に富んだものであったと言えよう。

(福田亘孝記)